



Data

監督・脚本: オリヴィエ・アサイヤス

出演: ギヨーム・カネ/ジュリエット・ピノシュ/ヴァンサン・マケニユ/ノラ・ハムザウイ/クリスタ・テレ/パスカル・グレゴリー

👁️👁️ みどころ

おしゃれで軽快な会話劇ならウッディ・アレン監督の独壇場だが、重厚な会話劇なら、トルコのヌリ・ビルゲ・ジェイラン監督や中国の胡波（フー・ポー）監督。しかし、哲学的でありながら、かつユーモアと皮肉に富んだフランス流の会話劇なら、やっぱりオリヴィエ・アサイヤス監督！？

本作の会話劇の登場人物は、2組の夫婦+α。時代とテーマの設定はわかりやすいが、ダブル不倫の生々しさ(?)は、やっぱり自由と人権の国たるフランス流？その点、男も女も相当したたかだ。

しかして、登場人物たち各位の、「変わらぬために、変わるしかない」の名セリフの実践は？



■□同じ会話劇でも、本作はアサイヤス流！フランス流！■□

アメリカの巨匠ウッディ・アレン監督作品は、おしゃれで軽快な会話劇が面白いが、トルコの巨匠ヌリ・ビルゲ・ジェイラン監督の『雪の轍』（14年）（『シネマ 36』124頁）や『読まれなかった手紙』（19年）に見る会話劇は重厚そのもの。テーマも、ウッディ・アレン監督作品は恋物語が多いのに対し、ヌリ・ビルゲ・ジェイラン監督作品は哲学的で人間の本質に絡むものが多いから、難解だ。他方、そんな会話劇を延々と234分間も薄暗いスクリーン上で展開させた名作が、29歳で自殺してしまった中国の胡波（フー・ポー）監督の『象は静かに座っている』（18年）（『シネマ 46』掲載予定）だった。

しかして、本作は『夏時間の庭』（08年）（『シネマ 22』未掲載）、『アクトレス ～女たちの舞台～』（14年）（『シネマ 37』92頁）等の作品でフランスを代表する巨匠オリヴィエ・

アサイヤス監督による会話劇だが、その傾向はトルコのヌリ・ビルゲ・ジェイラン監督や中国の胡波監督風ではなく、明らかにウッディ・アレン監督風！フランスは1789年の「フランス革命」に象徴されるように、「自由、平等、博愛」の国だが、それは同時に、自我意識や権利意識が強く、議論好きなことを意味する。その点ではドイツも同じだが、ドイツはトコトン理屈っぽいのに対し、フランスはユーモアと皮肉をタプタプ絡めた論理展開が得意。しかも「人間は考える葦である」という深淵な言葉を残した哲学者ブレイズ・パスカルを生んだ国だから、自分を正当化する理屈の展開においては、だれにも負けない国民性を持っている。

以上は完全に私の独断と偏見に基づくフランス観だが、本作を観ていると、それがズバリ当たっている感が・・・。

■□■ 会話劇の構成員は2組の夫婦。その実態は？ ■□■

会話劇で構成する映画では、登場人物が限定されている。それは、『雪の轍』『読まれなかった手紙』『象は静かに座っている』を観てもわかることだ。本作には2組の夫婦がその会話劇の構成員として登場する。第1は、敏腕編集員のアラン（ギョーム・カネ）と、その妻で女優のセレナ（ジュリエット・ビノシュ）。第2は、作家でアランの友人であるレオナル（ヴァンサン・マケーニュ）と、その妻で政治家秘書をしているヴァレリー（ノラ・ハムザウィ）夫婦だ。日本と違って「夫婦共働き」はフランスでは当たり前だが、本作を観ていると、それ以上に「夫と妻は同権」だということが会話の端々で理解できる。ところが、一見仲のよさそうに見えるこの2組の夫婦も、ある意味で倦怠期、そして、ある意味で仮面夫婦・・・？

アランは今、電子書籍ブームが押し寄せる中、何とか時代に適応しようと努力していたが、そんな中、作家で友人のレオナルから不倫をテーマにした新作の相談を受けていた。このように、本作では男同士の仕事上の付き合いは順調そうに見えるが、実はこれもかなり不安定。なぜなら、アランは書籍のデジタル化にどこまで対応できるか？という問題と、すわ、会社を買収されるのでは？という問題に直面していたから。他方、レオナルについては、今出そうとしている新作『終止符』は相変わらず「私小説」だが、そのモデルについてさまざまな意見（批判？）が出されていたからだ。

そんな問題だらけの中に置かれている、この2組の夫婦のそれぞれの場面における会話劇は、さて如何に？

■□■ 2組の仮面夫婦ぶりは？不倫の告白は？ ■□■

自由と人権の尊重は、離婚率の拡大と正比例？そんな仮説が成立するのかわかりは知らないが、フランスでは離婚は日常茶飯事だし、シングルマザーはどこにでもゴロゴロ転がっている。そんなフランスでは、倦怠期に入っているこの2組の夫婦それぞれの不倫も、

ある意味で当然？オリヴィエ・アサイヤス監督がそう考えているのかは知らないが、本作では、まずアランが若くて優秀しかも美人のデジタル担当の社員ロール（クリスタ・テレ）と展開する不倫の姿に注目したい。仕事絡みの不倫は何かと便利だが、かつて1950年、60年代に森繁久彌が演じた東宝の『社長』シリーズでは、常に浮気の一步手前で恐妻の力によって防止されていた。それに比べると、本作に見るアランとロールの堂々とした浮気（不倫）のやり方は・・・？

他方、レオナルドの方も、若い愛人はいないものの、親友でビジネスパートナーであるアランの妻セレナと6年間も「秘密の関係」を結んでいるそうだから、恐れ入る。本作のパンフレットには、「PARIS MAP 一ロケ地マップ」があり、ここでは、⑤セレナとレオナルドが密会するパー、⑦セレナがレオナルドに別れを切り出すカフェが記されているので、その場所とともに、この2人の密会のあり方と別れの姿をしっかりと確認したい。

また、セレナを演じるジュリエット・ビノシュは、3つの主要なヨーロッパの映画祭すべて（ベルリン、カンヌ、ベネチア）で賞を取った最初の女優として有名だが、ヴァレリーを演じたノラ・ハムザウィは、これまで私がまったく知らなかった女優。そんなノラ演じるヴァレリーは、「夫が浮気しているのでは？」と薄々感じていながら、それを切り出せないまま、政治家秘書の活動に邁進していた。この手のパターンの活動家は日本にもドイツにもたくさんいるが、そんなノラは信頼していたボスの政治家が、ある日、ある「性的スキャンダル」を起こしたことによって、一気にその熱が冷めてしまうことに。そして、それをきっかけとして、レオナルドに浮気の話を持ち出すと、何とレオナルドの口から出た浮気のお相手の名前は・・・？こりゃまあ、深刻といえば深刻、悲劇といえば悲劇。しかし、ある意味人間的であり、喜劇といえば喜劇・・・？

■□■変わらぬために、変わるしかないの名セリフの実践は？■□■

ルキーノ・ヴィスコンティ監督の『山猫』（63年）は、既にベテランの域に達した（？）バート・ランカスターと、若き日のアラン・ドロンの、そして、最も美しい時のクラウドピア・カルデナーレが共演した壮大な歴史ドラマだった。私は2016年6月12日にあらためてその『山猫 4K 修復版』を鑑賞した（『シネマ38』未掲載）が、同作ではクライマックスでの豪華絢爛たる舞踏会の他、バート・ランカスターが演じたサリーナ公爵の「永遠に変わらないためには、変わり続けなくてはならない」とのセリフが有名。これは、いつの時代でも、また、どんなテーマにも通じる名セリフだが、本作では、書籍のデジタル化が進む中、敏腕編集者のアランがいかか「変わらぬために、変わるしかない」を実践していくかがストーリー全体を牽引するテーマになっているので、それに注目！

そのテーマを積極的に推進しているのが、デジタル担当の若手社員ロールだが、ロールの変化が素早いものに対して、アランの変化はゆったりしている上、何かとあいまい。これで本当に書籍のデジタル化という時代の流れに適応していけるの？それと同じように、レ

オナールの方も、新作『終止符』では、「私小説しか書けない」という世間の評判から抜け出すことは全然できていないようだから、それでホントに生き残れるの？

「家庭人間」ではなく「仕事人間」を自認している私は、本作の主人公になっている2人の男の、そんな仕事面における「変わらぬために、変わるしかない」の実践に不安を覚えざるを得ない。しかし、フランス人であるアランもレオナールも、仕事人間の面ばかりではなく、家庭人間、そして、自由恋愛をする男としての側面が極めて強いようで、本作の中盤から後半では、2人ともその面では「変わらぬために、変わるしかない」を見事に実践していくので、それに注目！

本作の「INTRODUCTION」には、「名匠オリヴィエ・アサイヤス監督がパリの出版業界を舞台に＜本、人生、愛＞をテーマに描く、迷える大人達のラブストーリー」と書かれているが、なるほど、なるほど・・・。

2020（令和2）年1月27日記